



学習にあたって

□本書の特徴

本書には合計120のキーワードが収録されています。キーワードの選定にあたっては、過去の入試問題を徹底的に分析して頻度の高い論点やテーマを抽出するとともに、現在の学問動向や時代性もふまえて、今後出題が予想される用語も多数収録しています。とくに第1章「新しい人間観」では、単に出題可能性が高いだけでなく、大学入学後の基礎教養としても欠かせない用語を選んでいきます。

既存の小論文キーワード集は、各分野における重要な事象解説が中心で、思考の補助具となるような理論や概念は手薄でした。たとえば、「相関関係」と「因果関係」は、統計やデータを読み解く上で「基本のき」とも言えるキーワードなのに、収録しているキーワード集はほとんどありません。

最新のニュースも含めて、事象は挙げていけばキリがありません。その意味では、本書で扱っている事象は、

小論文で出題されるトピックの一部でしかありません。類書では扱っていても、本書に収録されていない用語も多数あるでしょう。

でも、「考えるための引き出し」としてのキーワードには欲張りしました。そのほうが、ニュース的な用語一つを知るよりも、さまざまな小論文に活用できるからです。本書を通じて、知識を増やすだけでなく、考える力そのものを鍛えてください。それは、小論文入試だけでなく、大学での学び、さらにはその先へとつながる確かな力になるはずです。

□効果的な利用法

本書は、小論文で求められる「書き方のスキル」と「書く内容の蓄積」のどちらも十分に身につけることができるように、さまざまな工夫を盛り込みました。以下、学習の流れに沿って、本書の活用法を説明していきます。

①イントロダクションによる分野理解

最初に、各章の冒頭のイントロダクションを丁寧に読

①イントロダクションによる分野理解

その章で扱う
キーワードは青字

Introduction

近代的人間観のゆらぎ

「近代的人間観」から「近世」を捉えた関係性について

近代社会は、「人間は合理的で、自立した判断主体である」という人間観を前提として築かれてきた。人は自らの利益を計算し、合理的な選択を行い、その結果に責任を負う存在だと考えられてきたのである。この人間観は、法や民主主義、市場経済といった制度を支える重要な基盤となってきた。

しかし、現在の「近代的人間観」は大きく揺らいでいる。複雑化する社会の中で、私たちは自らの力だけで生きていくわけではなくなっている。あらゆるものが生み出している。近世的人間観やケアの観念は、人間を孤立した点としてではなく、他者との関係の中（ネットワーク）の中に存在する結び目として捉え直す。私たちは生まれながらに誰かのケアを必要とし、他者に依存しなければ生きていけない「弱さ」を数えられた存在である。だが、その依存関係こそが、人間を人間たらしめているのではない。むしろ、そうした関係が、さまざまな学問分野から存在として捉えられているのだ。

小論文を書くうえでの活用法

こうした「新しい人間観」に関する考え方は、小論文の書き出しにおいて大きな武器となる。

小論文の初めは、往々にして問題の原因を個人の内面に求めがちだが、「マナ」が悪いのは重要だが、いかに「悪い」人間をなくすには心の教育が必要だ」といった「悪い人間」にもとづいた行動をとるのではなく、個人の努力や心がけだけで解決を求められることは限界がある。「新しい人間観」にもとづけば、社会制度を別の視点で眺めることができる。人が行った行動をとるのではなく、制度に不備があるからではないか。差別や偏見が生まれるのは、その人の性格が悪いからではなく、目の見えない人に配慮がなかった「バイパス」のせいではないか。このように捉えることで、解決策は「心の持ちよう」という抽象的な精神論から、「制度のデザイン」や「制度設計の決定」といった具体的な提案へと展開することができる。

この「人間観の転換」を後述しているのは、哲学や思想だけでなく、認知科学、認知心理学、行動経済学といった近年の科学的成果が、従来の人間観のイメージを裏切りにしつつある。

たとえば、本書で触れる「二重過程理論」や「バイパスの研究」は、人間の思考がいかに複雑で、感情に左右されやすく、非合理的であるかを明らかにした。私たちは常に論理的に思考して決断しているわけではない。多くの場合、無意識の感情や過去の経験に頼り、時に論理的な判断を下している。

また、アフォーダンスやアクターネットワーク理論といった視点は、人間の行動が本人の意志だけで決定されるのではなく、スマートフォンの「通知」や、都市の「環境」によって巧みに誘導されていることを示している。つまり、最新の科学的知見は、人間を、常に合理的で自立した主体として理想化するのではなく、感情を持ち、偏りを抱え、他者の環境に影響されながら生きる「計画的な」といった具体的な提案へと展開することができる。

本書のキーワード解説は、そのための思考の枠組みを提供するものである。人間をどう捉えるかが変われば、社会の見え方も、小論文の書き方も変わる。この章を通して、新しい人間観を自分の言葉で使いこなせるようになることを目指してはほしい。

モノ・技法	近代的人間観	新しい人間観
人間の捉え方	合理的で自立した	感情や偏りをもつ
行動のあり方	合理的・計画的	感情・環境・思い
思考のあり方	論理的・分析的	直感的・直観的
思考の主体	個人	個人と社会との関係
思考の前提	合理的・計画的	感情・環境・思い
思考の目的	合理的・計画的	感情・環境・思い
思考の結果	合理的・計画的	感情・環境・思い

②キーワードの理解

重要部分は赤字

解説

要点

1 関係主義的人間観

「関係主義的人間観」は、近代の個人主義的人間観への批判から生まれたようにもなった考え方だ。西洋近代の思想では、人間はまず「自律した個人」として存在し、その後他者や社会と関係性を結ぶと考えられてきた。孤立した個人を出発点として、その個人同士が合意することによって国家や社会秩序が成立するという図式をとっている。

こうした個人主義的人間観に対して関係主義的人間観では、そもそも孤立した個人など現実には存在し得ないという前提から出発する。人は生まれながらの関係から本来関係の中であり、互いに依存し合っている。関係性によって育まれ、他者との相互作用によって自己を形成する。個人主義的人間観は、あらゆる人間に個人としての

2 ケアの倫理

「ケア」の倫理とは、本質的に心理学者やカウンセラー、セラピストが「関係性」として捉え、実践してきた概念だ。「ケア」という「三つの関係」とは、普遍的なルールを公言し、権利を平等に運用的な行動を行うという立場である。この立場では、個人はまず自立した存在として想定され、誰に対しても同じように適用できる原理やルールが適用される。

これに対して、ケアの倫理は、人間がそもそも他者依存的存在で、他者との関係の中で生きていくという前提から出発する。人は幼少期からケアを受けているという前提から、大人になっても他者の支えや配慮を必要とする。このような現実を踏まえて、ケアの倫理は「具体的な状況」や「相手との関係性」を考慮しながら、柔軟にケアする「心」を重視する。身近な人への気遣いや配慮

「関係主義的人間観」は、近代的人間観の「個人」を「関係性」の中で捉え、個人はまず「関係性」の中で生きていくという前提から出発する。人は生まれながらの関係から本来関係の中であり、互いに依存し合っている。関係性によって育まれ、他者との相互作用によって自己を形成する。個人主義的人間観は、あらゆる人間に個人としての

「ケア」の倫理とは、本質的に心理学者やカウンセラー、セラピストが「関係性」として捉え、実践してきた概念だ。「ケア」という「三つの関係」とは、普遍的なルールを公言し、権利を平等に運用的な行動を行うという立場である。この立場では、個人はまず自立した存在として想定され、誰に対しても同じように適用できる原理やルールが適用される。

これに対して、ケアの倫理は、人間がそもそも他者依存的存在で、他者との関係の中で生きていくという前提から出発する。人は幼少期からケアを受けているという前提から、大人になっても他者の支えや配慮を必要とする。このような現実を踏まえて、ケアの倫理は「具体的な状況」や「相手との関係性」を考慮しながら、柔軟にケアする「心」を重視する。身近な人への気遣いや配慮

出題例、キーワードに関連する例文

や現象を扱う場合もあれば、「関係主義的人間観」や「二重過程理論」のように、物の見方や考え方、理論を扱っている場合もあります。小論文を書くためには、そのいずれも必要だと考えるからです。

キーワードは丸暗記するようなものではありません。志望する学部・学科に関係するキーワードを中心に繰り返し通読し、解説文を自分で簡条書きにしたり、図式化したりすることで、理解は深まっていくはず。キーワードによっては、出題例や例文を付けているものもあるので、学びの材料にしてください。

③ ワーク

第2～8章については、キーワード解説の後に、該当キーワードが用いられている課題文や資料と、取り組みやすいワークを設けました。いきなり800字といった長文の小論文を書くのは、多くの人にとって非常に高いハードルです。また、十分な読解力がないまま書き始め

んでください。ここでは、その章で取り上げる分野について、中心的な論点やテーマのほか、関連する学部・学科、入試の傾向、小論文を書くうえで活用の仕方などを解説していきます。

従来のキーワード集は、「情報」「環境」「教育」などの分野で区分していても、いきなりキーワード解説に入るため、その分野全体が小論文でどのように問われやすいのか、どこに注意して考えればよいのかが見えにくいという難点がありました。本書ではまず、分野と小論文との関連を示すことで、これから学ぶキーワードの位置づけや重要性を理解しやすくしています。

② キーワードの理解

イントロダクションの次は、いよいよ本書のメインパートであるキーワード解説です。まず、枠で囲んだ要点を確認したのち、「解説」を読んでいきましょう。

先述したように、本書に収録したキーワードには、「生成AI」や「少子化」のように事象

④実戦演習

設問要求の整理

着想のポイント

解説

入試問題

構成メモ例

解答例

③ワーク

このユニットで学んだ
キーワードは青字

問題

解答例

解答の着眼点

読解のポイント

てしまうと、出題者の意図や設問要求を読み違え、問いに対してとんちんかんな答えを返してしまうことにもなりかねません。まずは、出題者の意図を正しく読み、問いに対してきちんと「打ち返す」こと。本書のワークは、そのための基礎体力を養うことを目的としています。

多くの小論文入試では、自分の意見を述べる設問以外に、課題文の要約や傍線部説明、図表の読み解きなど、理解度を測る設問も付随しています。また、自分の意見を求める設問でも、「具体例を挙げる」ことを要求するケースも多く見られます。

ここでは、そうした入試傾向を踏まえて、さまざまなタイプの設問を1問出題しています。過去の入試問題から引用している場合は、元の入試で複数の設問があったとしても、学習効果の高い1題に絞って掲載しました。実際に問題に取り組むことで、知識の定着を図るとともに、本格的な小論文を書くための基礎体力を身につけてください。

それぞれの文章や図表は、該当するキーワードを理解するうえで、学習効果の高い題材を選んでいます。過去の入試問題の抜粋もあります。学習効果を優先して、オリジナルに作問したのも数多く含まれています。

また、それぞれの文章や図表には「読解のポイント」をつけています。これらを活用して、正確に課題文や図表を読解できたかどうかを自己点検してみましょう。

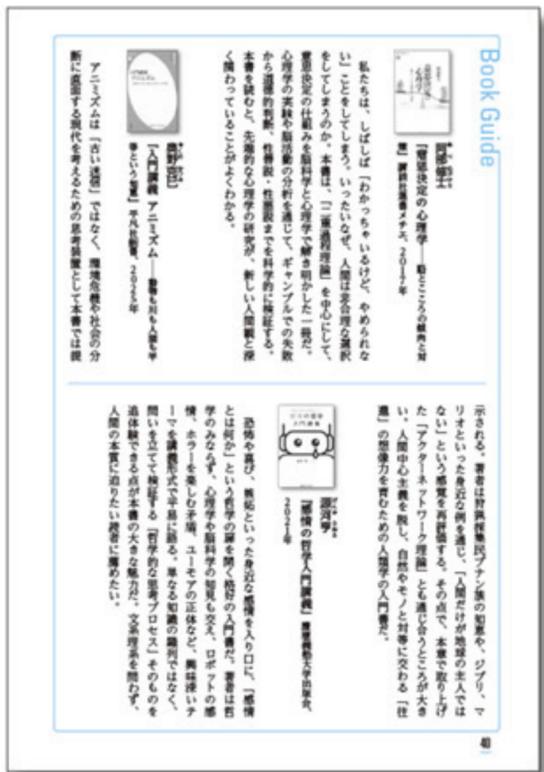
なお第1章は、具体的な知識や論点を扱っている他の章と異なり、分野を超えて思考を深めるための考え方や理論を中心に扱っているため、ワークは掲載していません。

④実戦演習

各章の末尾には、その章の内容と関連の深い、本格的な小論文問題を設けました。いずれも実際に出題された入試問題から精選しています。これは実践的なトレーニングの場です。それぞれの問題には、詳細な「解説」や「設問理解」



⑤ブックガイド
 各章の内容をさらに深く学びたい人に向けて、関連書籍を紹介しています。小論文では、論点への理解が深まるほど、議論に厚みが出てきます。ブックガイドは、そうした理解を一段深めるための入口として活用してください。



⑤ブックガイド

「着想のポイント」「構想メモ例」「解答例」を掲載しています。ここでは、独創的な小論文を書くことよりも、設問に対して、出題者の意図を読んで、きちんと打ち返すことを重視しました。

実戦演習に取り組む際は、まずは時間を気にせず、自分が納得いくまで考え抜き、ベストと思える答案を完成させることを優先してください。

実際の試験では、問題のタイプや設問の数によって最適な時間配分は異なります。しかし、どのような場合であっても「いきなり書き始めない」ことが鉄則です。本書の「構想メモ例」を参考に、必ず書く前に全体の設計図を作る習慣を身につけてください。

実際に自分で答案を作成してみ、書き終えたら、すぐに解答例や解説を確認し、自分の答案と比較してみましょう。論点の押さえ方は適切だったか、主張と理由はかみ合っているか、具体例は効果的に使えているか、といった点をチェックすることで、次に生かすべき課題が明確になります。

なお、ワークも実戦演習も解説や解答例はすべてオリジナルであり、大学が公表したものではありません。

最後に、本書が対応する入試形態と志望学部について補足します。

本書は主に「一般選抜」での小論文入試を想定して構成されていますが、本書で養われる読解力や思考力、そして論点に関する背景知識は、おのずと「総合型選抜」や「学校型選抜」で求められる力にも直結しています。どの入試形態であっても、求められる基礎体力は共通しているからです。

また、各章の活用については、自身の志望学部・学科に合わせて強弱をつけて学習してください。第6章の「教育」と第7章の「医療・看護」は、それぞれの専門分野に特化した内容を扱っていますが、それ以外の章は人文・社会科学系をはじめ、複数の学部・学科に役立つ論点を扱っています。教育学部や医療・看護系学部以外を志望する皆さんは、第6章・第7章以外のすべての章に目を通しておくことをおすすめします。分野を横断して幅広い知見に触れることで、どのようなテーマの出題に対しても動じない思考力を磨いてください。